

「ペイ・フォワード possibleの王国 PAY IT FOWARD 2000年製作 123分」の見どころ

●あらすじ: ラスベガスに住むアルコール依存症の母(ヘレン・ハント)と、家を出て行った家庭内暴力を振るう父(ジョン・ボン・ジョヴィ)との間に生まれた、少年トレヴァー(ハーレイ・ジョエル・オスメント)。11歳で中学1年生(アメリカでは7年生)になったばかりの彼は、社会科の最初の授業で、担当のシモネット先生(ケヴィン・スペイシー)と出会う。授業のテーマは、「今日から自分で世界を変えてみよう。」先生は「もし自分の手で世界を変えたいと思ったら、何をする?」という課題を生徒たちに与える。生徒たちのほとんどは、いかにも子供らしいアイデアしか提案できなかったが、トレヴァーは違った。彼の提案した考えは、「ペイ・フォワード」。

トレヴァーはこれを実践するため、“渡す”相手を探す。仕事に就かない薬物中毒の男、シモネット先生、いじめられている同級生…。いろいろと試みるものの、なかなかうまくいかず、彼は「ペイ・フォワードは失敗だったのではないか」と思い始める。そんな中、トレヴァーのたくらみで、母と独身のシモネット先生は急接近する。顔と体に大きな火傷を負っているシモネットは中々心を開かなかったが、2人はやがて結ばれる。しかしトレヴァーは、いじめられていた友人を助けようとして、いじめっ子に刺されて死んでしまった。だが彼の“ペイ・フォワード”計画は街中に広まっており、街の人々は亡きトレヴァーを追悼するのだった。トレヴァーの気づかないところで、このバトンは今に受け渡されていたのだ。

上映前

●作品誕生のきっかけ:

原作者キャサリン・ライアン・ハイドは「ペイ・フォワード」誕生についてこう語っている。治安の悪い町で車がエンストしてしまったハイドは、車に近付いてくる男2人に恐怖心を抱く。しかし男はエンストしてしまったハイドの車を快く修理してくれたのだった。そこから、この“善意を他人へ回す”という思考が誕生した。

●題名のいわれ: 「厚意の先渡し」「先へ送れ」「次へ渡せ」(×受けた相手に返す。)人から受けた厚意・善意・思いやりをその相手に対して

×恩返し=“ペイ・バック(後方)”するのではなく(日本人は「お返し」が得意)、

○他の誰かに違う形で先送りして善意を広げ、さらにそれぞれ親切を受けた者が3人に親切をしていく=“ペイ・フォワード(前方)”というもの。Payには、①支払う②報いる・返すの意味がある。(映画の中では「次へ渡せ」と翻訳。=“厚意のネズミ算”)

●《クイズ》この映画の登場人物で、数年後に主役を演じた俳優がいる。どの人物でしょう? ⇒《答え》「キャスト」参照。

スタッフ・キャスト

●キャスト:

トレヴァー・マッキニー (ハーレイ・ジョエル・オスメント「シックス・センス」「A.I.」)

ユージーン・シモネット (ケヴィン・スペイシー「アメリカン・ビューティー」)

アーリーン・マッキニー (ヘレン・ハント「恋愛小説家」)

クリス・チャンドラー (ジェイ・モーア)

ジェリー (ジェームズ・カヴィーゼル)⇒クイズの答え:「パッション」のキリスト役。ジム・ガヴィーゼル。

グレイス (アンジー・ディキンソン)

リッキー・マッキニー (ジョン・ボン・ジョヴィ)

ショーン (ショーン・パイフロム)

●スタッフ[編集]

監督: ミミ・レダー (ディープ・インパクト)

製作: ピーター・エイブラムス、ロバート・L・レヴィ、スティーヴン・ルーサー

製作総指揮: メアリー・マクラグレン、ジョナサン・トレイスマン

原作: キャサリン・ライアン・ハイド

脚本: レスリー・ディクソン

編集: デイヴィッド・ローゼンブルーム、A. C. E.

撮影: オリヴァー・ステイブルトン、B. S. C.

音楽: トーマス・ニューマン

美術: レスリー・ディリー

衣装: レネー・アーリック・カルファス

上映後

●キャッチコピー: ～ あなたにも世界は変えられます ～

事例

① 沖縄では、言葉になっていなくても、心に培われている考えです。知人友人1人もいない沖縄に渡ってきた2001年から結婚するまでの4年間、私に毎日お弁当を作ってくれる職場のおばあちゃんがありました。自分の息子が東京で一人暮らししていた時に、毎日のように食事の世話をしてくれた人がいたから、これは恩返しだと。

② 町のごみを拾うことです。独りで町の清掃活動をしていると、商店街の人たちや通行人の方々に温かいご声援を頂きました。「ありがとう。」「若いのに偉いね。」「あなたはどこの人?」「久しぶりに感動したよ。」「君に会えてうれしかった」など言葉をかけてくれます。

③ FBで「感謝のバトンタッチ」。神に感謝できることを3つ挙げ、次の人に渡す。

結び この映画から教えられること:

① 人の価値は年数によらない: 13歳の少年が成し得たことの大きさ(本人は気づかない)。⇒母を、シモンズ先生をさえ動かす。最後には、どうしても勇気がなくてできなかったいじめられっ子を助けるために上級生のいじめっ子グループに立ち向かい、命を落とす。

② 思うだけではダメ: 実際にムーブメント(行動)を起こさなければ、何も変わらない。映画の主張は、1. 善意を「先に」送ること。2. それを広げること。

"If you think it's impossible, it's impossible. If you think it's possible, it's possible. Either way, you are right." – Anonymous

「もし不可能だと思ったら不可能だ。もし可能だと思ったら可能だ。いずれにしてもあなたが考えるとおりになる」-- (英文・訳: 舟田 譲二)

- ③ 決してあきらめない。: なすべきことをしたら、あとは神に委ねる。自分の思いも及ばないところにも、行為は先送りされていることを信じよう。

*トレヴァーの死は、“一粒の麦”。(ヨハネ 12:24)「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみかたです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。」

⇒映画の冒頭とラストシーン:すでにいろいろなところに広がっていた!

*トレヴァー「慣れきった人々は良くないこともなかなか変えられない。臆病なんだ。勇気を出して行動に移すことで、それが人から人へとつながっていく。あきらめたら負けなんだ。」

- ④ 完璧を期さない。: 「あなたにできることをする。」(ベタニヤの女方式)(マルコ14:8)

*動機:×律法主義的に、義務感で。⇒できなかったときの敗北感、挫折感。

*数: 特に「3人」にこだわる必要はない。例えば電車の中でお年寄りの方に席を譲る。

*機会: あえて困っている人を探し出すまでもなく、たまたま困っている人と出会ったときに。(それも神の計画のうち。神に“たまたま”はない。)

- ⑤ 相手に見返りを求めない。:

*相手が心ある方であれば「お礼をさせてください」と言ってくる。その時になって初めて、「お礼なら、次へ渡してください」と説明する。

- ⑥ 私たちの「ペイ・フォワードの真の相手は神様(実際の相手は皆、小キリスト)»: 人ではなく、私を赦し、救ってくださった主にお返しをするつもりで。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」(マタイ 25:40).

*日本人は「ペイ・バック(お返し)」の文化:⇒善意、行為は”身内”だけ。いつも閉塞性の壁が付きまとう。

*いつも神様と“直結”: キリスト者こそ、真に「ペイ・フォワード」ができる者。

1. 人へ善意は、全て神への愛のお返し。(×人にしてやる。)

2. いつでもどこでも神が見ておられる。(×人の栄誉)

3. 神が報いてくださる。(×人からの見返り)

●「神の王国」こそ、「可能の王国」なのだ。

★いやあ、「聖書で読み解く映画」って、いいですね。ではまたお会いしましょう。ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ!